

# 宮古関係図書紹介

## 新里幸昭『宮古歌謡の研究 続1』

仲宗根 將二

### 1. 宮古歌謡への熱い思い

1964(昭和39)年以来五十年、宮古の歌謡の採集・研究に精力的に従事している新里幸昭元名桜大学教授は、このほど先に刊行した『宮古歌謡の研究』(2005年)に収録されていない諸論考に加えて、その後の研究成果をまとめ、『宮古歌謡の研究 続1』として上梓された。収録された11点の論考は大きく二つに分けられる。一つは直接宮古各地に幾度となく通って徹底した聞き取り調査にもとづく研究の成果、いま一つは、先学の研究成果を詳細によりみ込み考察して、もはや死語とも思える宮古方言語彙の数々を現在の読み手にも理解できるように読み解いた、文字通り珠玉の論考である。

前著に引きつづくこのたびの諸論考の上梓は、宮古歌謡の研究によせる著者の熱い思いが、如何に並々ならぬものであるかを示しているようである。

### 2. 語彙解説と索引づくり

前著では、おもに狩俣と池間島の「神歌」と「年中行事」等が扱われていたが、今回の著書では次のように、引きつづき狩俣地域を深め、さらに佐良浜、川満、上地、多良間島の「神歌」等を詳細に考察した9点と、先学が採集した歌謡の語彙解説並びに索引2点である。

宮古の歌謡トーガニ、宮古島狩俣の神行事「よーイぬうぷなー(祝いの大祭)」の歌謡、狩俣の十五夜のクイチャー、宮古狩俣カニャー元のタービ〜伝承者池間マツ子さまのご逝去を悼む、佐良浜のミヤコヅツ、下地町の歌謡〜川満部落の神歌と願い、多良間島の唱えもの、多良間島のシチウプナカの歌謡〜フダヤーとアレーキの神歌、『宮古島の歌』の研究〜ハワイ大学宝玲文庫蔵『宮古島の歌』語彙・索引集、稲村賢敷著『宮古島旧記並史歌集解』歌謡語索引と語彙集、以上11点である。

### 3. 田島一伊波に始まる

既に多くの先学が指摘しているように、宮古圏域の研究は、県内他地域にくらべて、歌謡に限らず全般的に遅れて出発している。その要因について、慶世村恒任は、宮古の「言語の不可解に因由して、多くの先学が沖縄や八重山等にひっくるめて『だろろう』程度の不真面目さでたかをくくってしまった為であろう」と指摘している(『宮古史伝』1927年)。「沖縄や八重山等にひっくるめて…」という文意からは、県内ではなく県外、とりわけ中央学会等とみなされる研究者への批判のようにも読みとれる。

宮古歌謡の採集と研究は、1897（明治 30）年、田島利三郎沖縄県中学校教諭が着手して、その教え子の伊波普猷に引きつがれ、さらに大正末期から昭和初期にかけて、柳田國男や折口信夫、金田一京助らの影響を受けたロシア人の日本研究家ニコライ・A・ネフスキーが登場してくる。地元では、慶世村や川平朝建、与儀達敏らの研究が始まるが、慶世村の夭逝、加えて「十五年戦争」突入で、戦争遂行に関わらないとみなされるすべての活動が事実上停止させられている。

#### 4. 戦後に本格化

宮古の歴史をはじめ歌謡研究が本格化するのは戦後である。戦火で焦土と化した戦後宮古の出発に当たって、宮古民政府は先人の歴史と文化に学ぼうと、1947（昭和 22）年、「新宮古建設の歌」を公募し、宮古文化連盟や文化史編さん委員会を発足させた。稲村賢敷、平良彦一、友利明令、与儀達敏、島尻勝太郎らは、通信・交通網の未整備のなか、大神・水納に至るまで調査を始めている。

1950 年 4 月、戦前・戦後を通じて県内で初めて開学した大学＝琉球大学は 1964 年 4 月、沖縄文化研究所を開設し、同年夏には宮古を県内初の総合調査地として、言語・文学・地理・民俗の四領域で総合調査を開始している。各班ともに 3～5 人編成で、文学班は外間守善・新里幸昭・本村勝史の 3 人である。以来 50 年、1968 年『宮古諸島学術調査報告（言語・文学）』刊行後も、外間・新里両教授の宮古調査はつづき、『宮古島の神歌』（1972 年）、『南島歌謡大成Ⅲ 宮古篇』（1978 年）等に結実させている。

新里教授は単独でも「外国語よりも難しい」（「序にかえて」）とみなされる宮古方言の歌謡語研究の基礎語づくりのため心血をそそいでいる。本書収録の、田島一伊波『宮古島の歌』の「語彙・索引集」、稲村の『宮古島旧記並史歌集解』の「歌謡語索引と語彙集」もその一環である。

#### 5. 宮古史解明に寄与

著者のこれほどまでの研究成果は、琉球大学国語国文学科在学以来、多くのすぐれた師と学友に恵まれたのが幸いしていよう。仲宗根政善、仲松弥秀、湧上元雄、中山盛茂、外間守善…ら、誰方も「沖縄学」のそれぞれの分野を代表する学究である。同時に何よりも著者自身の、地域ごとに微妙に異なる宮古方言を聞き分ける天性の能力と、学問へのあくなき探究心による成果であろう。

とはいえ難解な宮古方言の歌謡語のすべてが解明されているわけではない。永年にわたる著者の労を多とするとともに今後ともに、宮古の歴史や文化、民俗等の解明にも大きく寄与するであろう歌謡語の研究をさらに深められるよう期待するものである。